



代っ子通信

令和6年7月17日
〈第21号〉
校長 平塚智康

にんげんがさき 点数は後

1学期も、もう早や学期末を迎えました。明日は通知表渡しです。

私は、この時期になると、いつも下に載せた、相田みつをさんの詩が頭に浮かびます。期末テストの〇つけをして、クラスの子どもたちに点数をつけながら・・・。「にんげんがさき 点数は後」・・・教師として、親として、これだけはいつも肝に命じておかないと、何か大切なものを見失ってしまう、そんな気がして自分に言い聞かせてきました。

点
数

に
ん
げ
ん
は
ね
え

人
か
ら
点
数
を

つ
け
ら
れ
る
た
め
に

こ
の
世
に
生
ま
れ
て

き
た
の
で
は
な
い
ん
だ
よ

に
ん
げ
ん
が
さ
き

点
数
は
後

み
つ
を

精神科医の佐々木正美先生の著作「育てたように子は育つ」(小学館文庫)に、この詩を引用した次のような文章がありましたのでご紹介します。

育児や教育の最も重要な課題は、その子どもが持って生まれた長所に気がついて、それを持っている子どもに心底ほれほれしてやることだと思う。

欠点のない人間なんていないように、長所のない子どももない。その長所を発見して、いいなあと感激してやって、そのことを子ども自身にも気づかせてやることである。そうすれば、子どもに限らず人間はみんな百点になる。

ところが、親や教師や大人たちが間違っているのは、子どもの長所よりも先に短所や欠点のほうばかりを見つけ出して、それを直させようとすることである。欠点などそう簡単に直せるものではない。自分の胸に手を当てて考えてみればわかることではないか。そんな、どうせそう簡単に直すことなどできない欠点は、そのままにしておいて、長所のほうを見つけ出してやれば、子どもはその長所を頼りにして生きていける。

育児や教育の下手な人ほど、子どもの弱点や欠点ばかりにこだわっているように思えてしかたがない。

社会の中で生きていく時、評価は避けることができません。子どもたちは、社会に出たら、学校の通知表以上にシビアな評価に直面することになります。時には、自分のことが正当に評価されず、悔しい思いをしたり、苦しんだりすることもあるでしょう。

人生でつらい時や苦しい時、自分を支えるのは、自己肯定感(ありのままの自分を受け入れられる)・自己有用感(自分は誰かの役に立っているんだ、誰かに必要とされる人間なんだ)・自己効力感(自分もやればできるんだ!)だと私は思っています。自己肯定感・自己有用感・自己効力感が育まれていない人間は、困難や逆境に立ち向かっていく力が脆弱です。佐々木先生は、親や教師が、子どもの長所を見つけ出してやることで、いざという時、自分自身を支える自己肯定感・自己有用感・自己効力感を育むことができる、そのように述べておられるのだと私は解釈しています。

通知表には、お子さんの長所ばかりでなく、短所や課題も表れています。「はえば立て、立てば歩めの親心」・・・担任は、お子さんのさらなる成長を期待して、いろいろ話をするのでしょ。課題解決へ向けての改善策についても、懇談されることと思います。そして、保護者の皆さんは、その懇談を受けて、家庭でお子さんと話をされることと思います。

その際、最も大切なことは、子どもたちが、将来、自分の長所を頼りに生きていけるように、「子どもたちの長所を発見して、いいなあと感激してやって、そのことを子どもたち自身にも気づかせてやる」ことであることを、忘れない教師であり、親でありたいと思います。

「にんげんがさき 点数は後」